# 【概要版】

## １ 調査概要

### １）　調査の背景と目的

クリエイティブ・リンク・ナゴヤ（以下 CLN）では３つの主要な取り組みの１つ、調査研究として、初年度である 2022 年度および 2023 年度に名古屋圏のアーティスト・文化芸術関係者を対象とした調査を実施した。目的は、CLN が支援する対象者の実態を把握し、より効果的な支援や取り組みを計画・実施していくためである。質問紙調査（実施期間：2024 年 1 月から 2 月）では幅広い文化芸術関係者向けに表現活動や生活実態の現状について設問し、インタビュー調査（2022 年 2 月～2024 年 3 月）では美術および音楽関係者に主にキャリア構築に関する聞き取りを行った。本稿では後者のインタビュー調査の結果を報告する。

名古屋市の文化施策に関連する考慮すべき事項としては、長期的には将来的な人口減少（2021 年以降は減少）[1]やリニア開通によるストロー現象の発生などへの対策（たとえば地域活性化、若年層の流入促進など）がある。短期的には、アジア・アジアパラ競技大会（2026 年）などの市内での大規模イベントとの連動、個別案件としては名古屋市民会館の建て替え、それにともなう金山地区全体の再開発などがある。

また、名古屋版アーツカウンシル[2]の制度設計のために名古屋市が実施した調査報告書（2020 年度、2021 年度）や CLN 設立シンポジウム（2022 年 12 月）の結果から、名古屋の文化状況に関する課題としては、若手アーティストへの支援の不足（発表への支援不足、キャリアパス・ロールモデルの不在、首都圏流出など）、アーティスト自身のマネジメント力不足（スポンサー・助成金獲得やプレゼン力不足など）、マネジメント・サポート機能の不足（企画、広報、アーカイブ、評価などの専門部隊の不在）、他地域から見た名古屋の文化芸術へのブランド力不足（活動、人的交流、U・I ターンなどの停滞）、社会連携事業の担い手・体制不足（事例が少ない、連携の媒介者不足など）、民間企業の巻き込み不足 （市内企

---

[1] 名古屋市 HP「令和４年　愛知県人口動向調査結果（名古屋市分）」
https://www.city.nagoya.jp/somu/page/0000159339.html（2025 年 3 月アクセス）

[2] 名古屋市が条例に基づく市長の諮問機関として 2024 年 4 月から設置した名古屋市文化芸術推進評議会、2022 年 10 月に設立した地域の文化芸術活動を支援する中間支援組織クリエイティブ・リンク・ナゴヤを一体とした取り組みを指す。詳細は下記 HP 参照。
https://www.city.nagoya.jp/kankobunkakoryu/page/0000151646.html
（2025 年 3 月アクセス）

業全体での連携不足）などがあげられる。

本調査はこれらを踏まえ、名古屋で文化芸術活動に携わるアーティストがどのようにキャリアを形成してきたと認識し、現在どのような問題意識を抱いているか、それに対して自身をとりまく環境が今後どのような方向性を持つと望ましいと認識しているかを明らかにしていく。

**２）　調査の分野、調査方法とインタビュー項目**

今回の調査対象は名古屋および名古屋近郊で美術、音楽の分野で、表現活動の一定のキャリアを持っているアーティスト、あるいは活動企画に携わりアーティストの状況を熟知するマネジメント人材、教育者、批評家などである。表現活動と教育活動あるいはマネジメントに同時に携わる者も一定数含まれる。

調査対象者に関して、名古屋市のみでなく名古屋近郊の在勤・在住者、あるいは在勤・在住経験者を含めた理由としては、名古屋市外の愛知県、岐阜県、三重県にも文化施設・教育機関が数多くある、あるいは通勤圏内であるなど、文化圏・生活圏として一体となっている面があるからである。従って本稿の記述中、とくにインタビューの語り部分で「名古屋」とある場合、ひろく「名古屋圏」を指している場合がある。

美術と音楽をとりあげた理由は、2021 年 1 月に実施した名古屋市文化施策推進体制準備委員会のアンケート調査のうち、回答者の多かった分野、音楽（46%）、演劇・舞踊（19%）、美術（18%）のうち、美術と音楽は名古屋市および近郊に芸術系大学として愛知県立芸術大学、名古屋造形大学、名古屋音楽大学、名古屋芸術大学があり、また学部や学科として設置されている大学も名古屋学芸大学、愛知教育大学ほか複数あること、高校の専門学科、専門学校や予備校、教室なども多く存在することから、教育や人材育成の構造に共通部分があることである。また、音楽に関しては名古屋市および近郊にプロのオーケストラが 4 団体あることなどから職業として成立する要素が大きいこと、美術に関しては 2022 年 12 月に公募を実施した CLN 助成事業で美術の割合が多かったこと(採択総数 17 件に対し美術が 12 件)からも調査対象として適切と判断した。

調査方法としては、あらかじめ質問項目を複数提示したうえでの半構造化インタビュー[3]を行った。実施時期は美術が 2023 年 1 月～4 月、音楽が 2023 年 4 月～2024 年 3 月である。インタビューは対象者の指定する場所、あるいは CLN オフィスで実施した。時間は 1 時間～１時間半程度で IC レコーダーで録音した後にそれぞれ逐語録を作成した。主な質問項目は下記の通りである。

・職業としていること
・表現活動の主な発表の場

[3] 事前に一定の質問を決めておき、回答に応じ自由に質問を追加するインタビュー方法

・名古屋圏のアーティストのキャリア構築はどのようなものがあるか
・名古屋圏にいる理由/名古屋圏外に行った理由/名古屋圏に帰ってきた理由
・名古屋圏での表現活動の発表のハードル
・名古屋市や他の公的支援・受賞/民間助成などでキャリア構築のきっかけとなったこと
・公的支援に期待すること

インタビューはCLNのスタッフが担当し、美術は佐藤と笠木、音楽は佐藤と半田が実施した。対象者には実施前に、調査の趣旨と、調査への協力については対象者の自由意志に委ねられること、対象者は匿名として個人が特定されないようにすること、分析結果の公表方法などが含まれる依頼書を文書で示して説明し、同意を得たうえで聞き取りを実施した。分析と本稿執筆は佐藤が担当し、CLN内で確認した。また、本稿作成においては、中根多恵氏（愛知県立芸術大学准教授、クリエイティブ・リンク・ナゴヤ理事）から一部助言を受けた。

分析を美術と音楽に分けてそれぞれ行ったのはキャリアパスが分野により異なるためである。

なお、総論では表現者をアーティストと呼称するが、美術分野ではそのままアーティスト、音楽分野では音楽家あるいは個別に演奏家、作曲家と記述している。

### ３）　インタビュー対象者と選定方法

対象者は美術が21人、音楽が12人である。人数については双方ともに、語りの内容の重複が見られ、共通の状況把握や認識が認められると判断できる人数とした。対象者がアーティストの場合はアーティスト自身および周囲の傾向について、アーティストでない場合は対象者の知るアーティストの傾向から、質問項目をきっかけに自由に語ってもらった。

対象者選定にあたっては、アーティストは名古屋を主たる拠点としてプロフェッショナルとして制作あるいは発表を行っている、あるいは過去に行っていたアーティストであり、名古屋や近郊在住だけでなく他地域在住者も含まれる。過去に名古屋市をはじめとする自治体で公的支援を受けたり、民間を含む文化施設での活動委嘱をされた経験があること、地元の大学やオーケストラ等の機関に一定期間所属し活動を行っていることなどを基準にした。その他の関係者については当地方の文化施設や文化関連機関に属している者、あるいは主だったアートイベントなどに従事したことがある者を中心とした。最終的には有識者の意見も聞きながらCLNスタッフが検討し、年齢、出身大学などのバランスを考慮して決定した。

分析は、聞き取り調査において得られた全ての逐語録から、当調査の質問項目や問題意識にかかる語りをピックアップし、複数の対象者にわたる類似の語りをまとめて概念化し、それらをカテゴリーに分類した。インタビューデータは対象者の語りのうち典型的なものを引用しているが、記述にあたって語りは意味が変わらない範囲で中略、整文を行った。また

個人が特定されるような表現は意味が変わらない範囲で、固有名詞を一般名詞にするなど、言葉を置き換えている場合もある。

インタビュー対象者のリストは次のとおりである。

＜美術＞2023 年 1 月～4 月

| | 職業 | 拠点（現在） | 拠点（過去） | 大学・大学院 | 年代 | 性別 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| AA1 | フリー | 名古屋圏 | 海外 | 名古屋圏 | 40 代 | 男性 |
| AA2 | フリー | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 30 代 | 男性 |
| AA3 | フリー | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 30 代 | 女性 |
| AA4 | フリー | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 30 代 | 男性 |
| AA5 | フリー | 首都圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 40 代 | 女性 |
| AE1 | 大学（教職） | 名古屋圏 | 海外 | 名古屋圏 | 50 代 | 女性 |
| AE2 | 大学（教職） | 名古屋圏 | 首都圏 | 首都圏 | 60 代 | 女性 |
| AE3 | 大学（教職） | 関西圏 | 名古屋圏 | 関西圏、名古屋圏 | 40 代 | 男性 |
| AE4 | 大学（教職） | 首都圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 50 代 | 男性 |
| AE5 | 大学（教職） | 名古屋圏 | 関西圏 | 関西圏 | 40 代 | 男性 |
| AE6 | ギャラリーほか | 名古屋圏 | 関西圏 | 関西圏 | 60 代 | 男性 |
| AE7 | 大学（教職） | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 70 代 | 男性 |
| AE8 | 大学（教職） | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 60 代 | 男性 |
| AE9 | 大学（教職） | 名古屋圏 | 首都圏 | 首都圏 | 60 代 | 男性 |
| AM1 | 自治体（文化関連） | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 50 代 | 男性 |
| AM2 | 大学（教職） | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 60 代 | 男性 |
| AM3 | 自治体（文化関連） | 名古屋圏 | 首都圏 | 首都圏 | 60 代 | 男性 |
| AM4 | フリー | 名古屋圏 | 首都圏 | 首都圏 | 40 代 | 女性 |
| AM5 | フリー | 名古屋圏 | 首都圏 | 首都圏 | 40 代 | 女性 |
| AM6 | フリー | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 首都圏 | 50 代 | 女性 |
| AM7 | 企業（文化関連） | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 首都圏 | 40 代 | 男性 |

＊AA＝アーティスト　AE＝アーティストかつ教育者・マネジメント　AM＝教育者・マネジメント

＜音楽＞2023 年 4 月～2024 年 3 月

| | 職業 | 拠点（現在） | 拠点（過去） | 大学・大学院 | 年代 | 性別 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| MP1 | フリー | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 30 代 | 女性 |
| MP2 | フリー | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 30 代 | 女性 |
| MP3 | フリー | 首都圏 | 首都圏 | 首都圏 | 30 代 | 女性 |
| MP4 | フリー | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 40 代 | 女性 |
| MP5 | フリー | 名古屋圏 | 海外 | 名古屋圏 | 40 代 | 女性 |
| ME1 | 教職（大学） | 名古屋圏 | 海外 | 名古屋圏 | 50 代 | 女性 |
| ME2 | 教職（大学） | 名古屋圏 | 首都圏 | 首都圏・名古屋圏 | 40 代 | 男性 |
| ME3 | 教職（大学） | 名古屋圏 | 海外 | 首都圏 | 50 代 | 男性 |
| ME4 | 教職（大学）ほか | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 首都圏 | 40 代 | 女性 |
| MM1 | 自治体（文化関連） | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 関西圏 | 50 代 | 女性 |
| MM2 | 財団（文化関連）ほか | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 首都圏 | 40 代 | 男性 |
| MM2 | 企業（文化関連） | 名古屋圏 | 名古屋圏 | 首都圏 | 40 代 | 男性 |

＊MP＝演奏家・作曲家　ME＝演奏家かつ教育者・マネジメント　MM＝マネジメント

## ２　インタビューからの考察

### １）　美術編

名古屋および名古屋近郊に愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学という３つの美術大学があり、全国区でも実力のある学生を集めてアーティスト育成を行っている。これらの美術大学さらに美大受験の予備校、高校の美術科、デザイン科などの常勤・非常勤の教師としての雇用があり、当地域のアーティストの生計を支えるとともに、他地域からのアーティストの流入要因となっており、名古屋圏の美術界形成に大きな影響を与えている。特にペインティングに関しては独自の全国的なブランドとなっている。

1980 年代から 90 年代にかけて、名古屋市では全国的に見ても現代美術のコマーシャルギャラリー[4]が隆盛を誇り、ギャラリーがアーティストを発掘し育てていく、そのようなギャラリーから美術館がコレクションとして地元アーティストの作品を購入するというシステムが名古屋圏のアートシーン発展の原動力ともなっていた。現在は名古屋市のギャラリーは数も減少しているが、首都圏や関西圏のギャラリーが愛知の美術大学の学生やアーティストにも目を向けており、卒業制作展を中心に作家が発掘されていく。

同じ時期に名古屋市美術館、愛知県美術館、豊田市美術館などの公立美術館が開館し、私立もあわせて、現代美術を収集や企画の柱とする館が多数存在しており、企画展や作品購入などで地元作家を取り上げる機会が生み出されている。しかし、公立美術館の予算の縮小などによる地元作家の展示機会や購入機会の減少にともない、学芸員とアーティストの交流がかつてと比べて停滞する傾向もある。

美術館では、地元も含む現存作家のグループ展や個展が開催されており、加えて2010年からあいちトリエンナーレや関連イベント、その他にもアートプロジェクトが開催されている。そのため作品出品により地元作家と国際レベルや全国レベルのアーティストやマネジメント人材との交流、設営やサポートなどプロジェクト運営に関わる機会の創出などが、当地域の現代美術のレベルの底上げ、市民への現代美術の浸透やファンの拡大、他地域からのアート人材の流入やオーディエンスの誘致など、名古屋圏のアートシーンの活性化に貢献している。

地域性としては、首都圏と比べると家賃が安価で制作拠点としてのスタジオも持ちやすいことから、制作については当地域に在住して行っているが、発表は名古屋圏であまり行わず、首都圏のギャラリーに所属したり、他地域の展覧会などでの発表を中心に行なって

---

[44] 作家と直接契約を結び、展示・販売する企画画廊のこと

いるアーティストも多い。一方、自身で制作場所も兼ねたアーティスト・ラン・スペースを運営し、発表を行うケースが多いことも特徴である。

関東圏や関西圏ほどの規模には至らないが、上記のように教育機関、美術館、ギャラリー、アートプロジェクトが存在し、一定規模の美術活動があり、コレクターやアートファンもいてコミュニティが形成されているため、名古屋圏のなかだけでも、制作・発表まで一通り表現活動ができる環境は整っている。また、首都圏ほど美術業界が巨大で複雑でなく個人でも把握できるコミュニティの規模であり、生計をたてながら制作・発表活動できる環境にあるという声も多く聞かれた。逆に、地域完結できるため地元志向になってしまい活動が名古屋圏にとどまるアーティストが多いこと、他地域や海外との交流が少ないこと、名古屋圏のなかでもアートのジャンル間あるいは大学のコミュニティ間の横断的交流が見られないこと、新しいジャンルや活動が生まれにくいことなどが課題としてあげられた。

一方、アーティストの数の規模や存在感に比べ、アートマネジメント機能の不足に関しても語られた。セルフ・マネジメントは当然重要であるが、アーティストの職能とマネジメントの職能は異なるにも関わらず、予算や人材不足の面からアーティストがマネジメントも担うことが求められている。また、かつてはギャラリーや美術館が担っていたアーティストの発掘やキャリア支援などが縮小しているなか、アートプロジェクトやオルタナティブ・スペースでの活動も増えている。しかしながら経済的基盤は脆弱であり、雇用があっても任期つきであるなど、マネジメント人材が当地域で定着できるポジションが限られている。そのため、プロジェクトなどで取り上げられるアーティストや活動については、マネジメント人材の専門分野などからジャンルや傾向が限定的になっており、多様なマネジメント機能や人材による幅広い支援が望まれるとの指摘もなされた。

公的文化施設や公的支援に期待する声としては、助成金の交付の他、美術や他領域をまたいだ交流促進の場や制作場所の常設設置、大学卒業後のアーティストの支援の仕組み、専門人材によるアーティストへの継続的な伴走支援の仕組み、アーティストとマネジメント人材が出会う場の創出などがあげられた。

## ２）　音楽編

名古屋および名古屋近郊に愛知県立芸術大学、名古屋音楽大学、名古屋芸術大学という３つの音楽大学があり、名古屋圏を中心に全国区としても実力のある学生を集めて音楽家育成を行っている。さらに教員としての雇用が生まれることから、他地域から実績がある著名音楽家を教授陣として迎え、名古屋圏の音楽界の主要メンバーとして名古屋圏の音楽界を支えている。

プロのオーケストラが４団体（名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、愛知室内オーケストラ）あることも影響力があり、これらの団員になることが卒業生の目標かつ受け皿となっており、あわせてエキストラなどの需要も生み出している。また、オーケストラも全国から優秀な演奏家を名古屋圏内に流入させる大きな力となっている。

大学やオーケストラがあることにより、以前と比べるとUターン、Iターンも増加しているという声もあった。首都圏、名古屋圏など２拠点以上を持つ音楽家にとっても、交通の便のよい名古屋圏は強みがある。

一方、フリーランスで、大学にもオーケストラにも属さない音楽家は、自主公演、依頼公演、オーケストラのエキストラ、伴奏、講師などで生計をたてているが、自身の現在の活動に肯定的な対象者は、自主公演や、依頼公演など、自身のセルフマネジメント手法を確立し、定期的な公演の開催や依頼公演の獲得で、マネタイズしている。そのほか演奏技術の向上の他にも、コミュニケーションを積極的にとりながら、クライアントや観客の満足度向上のために改善を繰り返している様子がみられた。

全般的には、プレーヤーとしての音楽家は多く存在するが、それをマネジメントしたりプロデュースする機関や人材が少ないことが課題として語られた。大学やプロのオーケストラがプロダクションの役割を担い、演奏依頼に対する供給源となっている面もある。フリーランスの仕事は人的ネットワークを介してまわってくることが多いが、大学の繋がりなどネットワークが固定的になっていることも指摘された。そのような状況の中、公演のマネジメント担当者やプロデューサー抜きで、演奏家が自身でその役割を果たしながら成立する音楽活動がなされている。課題としてはプロデュース機能が低調のため、領域をつなぐ横断型の取り組みや、新しい潮流を取り入れた先端的な活動がなされていないという声が聞かれた。

公的文化施設や公的支援に期待する声としては、助成金の交付や練習場所や発表場所の提供、という条件整備的なものがあげられた。さらに、いろいろな領域を超えた活動、大

学間の交流や、芸術領域をまたいだプロジェクト、東海圏の広域を視野に入れた取り組みなど、現状の固定化された活動範囲を拡げるような機能、人材育成機能を持つパフォーミングアーツの大規模フェスティバルのような取り組みを期待する声もあった。賞や助成は、キャリアアップのきっかけになった者もいるが、一過性であったり、その後の活動にあまり影響を及ぼさなかったという声が多かった。

## ３ 本調査から得られた示唆

今回のインタビューでは、アーティストや関係者たちの生の声を聞くことができ、CLN の今後の活動の推進にあたって多くの示唆に富む意見を聞くことができた。

美術と音楽、両分野に共通して語られたのは、名古屋圏には専門大学や各種教育機関があることにより、アーティストの輩出と常勤・非常勤としての雇用創出があり、芸術分野としての一定の規模が保たれていることであった。加えて美術に関してはギャラリーや美術館、アートプロジェクトの存在が、音楽に関してはオーケストラが複数あることが、当地域の表現活動の原動力となっている。また、ランニングコストが低く抑えられることからアーティスト・ラン・スペース、演奏家の自主企画なども取り組みやすい状況にある。このように地方都市としては一定規模の文化芸術に関するインフラストラクチャーがあり、マネタイズされにくい分野においては公的機関や教育機関などのリソースがあることは大きく、他地域からのアーティストの流入も生じている。また首都圏、関西圏にも近い地の利から、当地域に生活拠点を置きながら全国的に活躍するアーティストも存在する。

しかしながら両分野ともに首都圏中心に動向が左右され、圧倒的に規模が異なることから、それと比べると名古屋圏ではアーティストの活動が当地方に限定されるケースが多い、マネジメント機能・人材が不足している、ネットワークが小さいという状況、美術、音楽も分野内でもコミュニティのサイロ化など、分野の内外において横断的なムーブメントが生まれにくいという課題も多く語られた。

CLN の活動方針に織り込んでいくべき点としては、名古屋圏に存在する教育機関、アーティスト、組織、施設などの資源と機能を把握し整理していくこと、限定された範囲のネットワークを横断し交流を促進するような場を創出すること、各コミュニティにとどまる情報を広く発信していくこと、他分野との連携事業に関して重要な要素であるマネジメント機能・人材育成について目を向けていくことなどがあげられる。

最後に、今回のインタビュー対象者は名古屋圏における文化芸術分野全体からみると限定的である。限られた時間とリソースの中で調査を実施するにあたり範囲を選定した理由は１章で述べた通りであるが、名古屋圏に存在する文化芸術活動は専門大学教育の中でカバーする分野にはとどまらず、プレーヤーはもっと幅広く、高等教育を通過しないキャリアの在り方もある。また、CLN が支援対象とする分野は、美術、音楽だけでなく、演劇、舞踊、古典芸能、生活文化、デザイン、建築なども含まれる。今回の調査の結果についてはその点も鑑みて参考とし、それ以外の分野についての実態把握も今後取り組んでいきたい。

【本調査実施担当者】＊担当者名・肩書は当時

■美術編：インタビュー企画・実施　（2023 年 1～4 月）

佐藤　友美（クリエイティブ・リンク・ナゴヤ　ディレクター）

笠木日南子（クリエイティブ・リンク・ナゴヤ　副ディレクター）

■音楽編：インタビュー企画・実施　（2023 年 4 月～2024 年 3 月）

佐藤　友美（クリエイティブ・リンク・ナゴヤ　ディレクター）

半田　萌　（クリエイティブ・リンク・ナゴヤ　コーディネーター）

■インタビューまとめ・本稿執筆

佐藤　友美（クリエイティブ・リンク・ナゴヤ　ディレクター）